

様式6（第15条第1項関係）（採択年度＝平成26年度以降）

平成28年 4月 7日

独立行政法人
日本学術振興会理事長 殿

研究機関の設置者の所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町36番地1	
研究機関の設置者の名称	国立大学法人京都大学	
代表者の職名・氏名	学長 山極 壽一 (記名押印)	
代表研究機関名及び機関コード	京都大学	14301

平成27年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2701	補助事業の完了日	平成28年3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	地域研究 (2701)
補助事業名（採択年度）グローバル化にともなうアフリカ地域研究パラダイム再編のためのネットワーク形成（平成27年度）				補助金支出額（別紙のとおり） 20,080,000円	

代表研究機関以外の協力機関

海外の連携機関 ケルン大学，ドイツ霊長類センター，エジンバラ大学，国立科学研究センター，アジス・アババ大学，ヤウンデ第1大学，ケープタウン大学，アンタナナリヴ大学

1. 事業実施主体

フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野
主担当研究者 カジ シゲキ 梶 茂樹	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	教授	アフリカ地域研究，言語学
担当研究者 イケノ ジュン 池野 旬	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	教授	アフリカ地域研究，経済学
担当研究者 キムラ ダイジ 木村 大治	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	教授	アフリカ地域研究，生態人類学
担当研究者 ヤマコシ ゲン 山越 言	京都大学	大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	アフリカ地域研究，霊長類学
担当研究者 タカダ アキラ 高田 明	京都大学	アフリカ地域研究資料センター	准教授	アフリカ地域研究，文化人類学
計5名				

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先（電話番号、e-mailアドレス）
ナカオヒサノ 中尾 久乃	南西地区共通事務部経理課外部資金 第一掛・主任	電話番号：075-366-7121 e-mail:A50gaishi1@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

2. 本年度の実績概要

平成 27 年度は全体計画を円滑に進めるよう、ケルン大学、エジンバラ大学、国立科学研究中心、アジス・アベバ大学、ケープタウン大学に主担当研究者、担当研究者を派遣し、若手研究者の受入体制（宿舎、大学施設の利用、セミナー等への参加など）の最終チェックおよび共同研究を推進していくための折衝・調整を行った。またすでに共同研究が進んでいるアンタナナリヴ大学からは主要連携研究者を 2 ヶ月間招へいし、この間に同様の折衝・調整を行った。そして、アンタナナリヴ大学、ドイツ霊長類センター、ケープタウン大学の 3 機関には、若手研究者を派遣した。アンタナナリヴ大学およびドイツ霊長類センターへは、以前から同センターの研究者と交流を深めてきた市野進一郎博士を派遣中である。またケープタウン大学へは、アフリカ地域研究資料センターの訾彦閻博士を派遣した。訾彦閻氏はこれまで高田准教授らと共同でボツワナでの民族間関係の研究を進めてきており、ケープタウン大学のカウンターパートとの親交も深い。したがって、円滑に研究目的が達成できると期待される。

市野進一郎博士、訐彦閻博士には渡航前に渡航予備計画を作成・提出させた。さらに、その内容に基づいて、担当研究者と若手研究者による事前相談会を開催し、渡航目的が本事業の趣旨にかなうように確認・調整を行った。平成 28 年度も引き続きこれらの若手研究者を連携機関に派遣し、本務校・連携機関の研究者との国際共著論文（若手研究者がポスドクの場合は、本務校での常勤研究者を含む研究チームを構成する）の執筆を目的としたワークショップ等を行って、アフリカセンターおよび ASAFAS と連携機関との間の組織的な共同研究を推進する。また平成 27 年度後半に、事業計画調書の「3 - (4) 若手研究者の選抜方針・基準、選抜方法」に記した手続きを経て、平成 28 年度中に派遣を開始する若手研究者の選考を行った。現在のところ 2 名が内定している（最終決定は平成 28 年度の予算額の内示後に行う予定である）。

また本事業の主旨に関する連携機関との相互理解を深めるため、担当研究者が中心となってこれまで遂行してきた国際共同研究の内容をまとめ、学術季刊誌 *African Study Monographs* の *Supplementary Issue* として発行し、連携機関に配付した。さらに海外の連携機関のうち、ケルン大学、アジス・アベバ大学、ケープタウン大学、アンタナナリヴ大学からは、連携研究者を京都大学に招へいした。招へいされた連携研究者を中心として、連携機関での国際化の取り組みやその研究内容に関する以下 4 回の連携国際ワークショップを開催した。第 1 回目は国際シンポジウム“*African Potentials 2016: International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence*”を 2016 年 1 月 23 日-24 日に京都大学にて開催した。その後は「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」と命名したセミナーを 3 回行った（2016 年 3 月 4 日、3 月 11 日、3 月 18 日にいずれも京都大学で開催した）。

また本事業で重点を置く GIS 関連資料解析・動画資料データベース構築のために、PC 一式、アクションカメラ、GPS 等のハードウェア、および GIS 関連資料（地形データ）・動画資料データ（アフリカ地域研究に関する DVD）・図書等一式（アフリカ地域研究、とくに人間-環境関係に関する書籍に重点を置いた）等のソフトウェアを購入した。さらに本事業独自のホームページ（和文、英文）を作成し、公開した<<http://brain.africa.kyoto-u.ac.jp/>>。このホームページでは、プロジェクトの概要、事業実施体制、連携機関の概要、派遣報告書、プロジェクトの成果、若手研究者への申請手続きなどについての情報を掲載しており、プロジェクトの進展に応じて随時更新していく予定である。

3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

本事業の目標は、地域研究のための研究環境が卓越しており、従来から京都大学のアフリカ地域研究資料センター（以下、アフリカセンター）と大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻（以下、ASAFAS アフリカ専攻）が学術交流を行ってきた海外の連携機関との双方向的な学術交流をさらに推進し、グローバル化が著しい現代世界において「アフリカ地域」を理解していくための研究パラダイムを再編することである。「2. 本年度の実績概要」で記した平成 27 年度の活動はこの目標に沿って計画したもので、これらにより連携機関との協業関係をいっそう強化することができた。事業初年度としての目標はおおむね達成できたと考えている。ただし、平成 27 年度は当初派遣を予定していた伊藤助教の退職等の事由により若手研究者の選抜および渡航計画の調整に予想以上に手間取り、派遣の開始が当初の予定よりもかなり遅れてしまったことは反省材料である。平成 28 年度は前年度に派遣を開始した 2 名の若手研究者を継続して派遣することに加え、新たに 3 名の若手研究者の派遣を開始し、全体としての研究計画の遅れを取り戻す予定である。

また当初は、平成 27 年度には担当の主要連携研究者が来日するアンタナナリヴ大学以外の 7 つの連携機関すべてに担当研究者を派遣し、若手研究者を受け入れる体制の最終チェックと細部に関わる折衝・調整を行う予定であった。しかし、このうちドイツ霊長類センターとヤウンデ第 1 大学には、先方の主要連携研究者との日程調整がつかなかったため担当・当研究者を派遣することを断念し、email 等での折衝・調整を行うこととなった。いずれの機関もアフリカセンターおよび ASAFAS アフリカ専攻とはすでに研究上の交流を行ってきているので本事業の遂行上大きな問題はないと考えるが、今後できるだけ速やかに担当研究者を派遣し、さらなる協業関係の強化に努めたい。

若手研究者は派遣されてからまだ間もないため目立った業績がでてくるのはこれからだと考えられるが、本事業の主旨に関する連携機関との相互理解を深めるために担当研究者が中心となって企画した *African Study Monographs* の *Supplementary Issue* は予定通り発刊することができた。これを配付した連携機関等からの評判は上々で、アフリカセンターおよび ASAFAS アフリカ専攻が積み重ねてきた国際共同研究の水準の高さを知らしめることができたと考えている。本事業の内容や成果を京都大学において議論するために企画した国際シンポジウム“*African Potentials 2016: International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence*”及び 3 回に渡って開催した「アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー」はいずれも盛況で、連携研究者と担当研究者を中心とする参加者の間で非常に活発な議論が行われた。これと関連して、本事業に関連する情報収集・情報交換を行うため、国内の地域研究拠点へ担当研究者や連携研究者を派遣する計画を入れておくとさらに活動の幅が広がったと思う。本研究プロジェクトで重点を置く GIS 関連資料解析・動画資料データベースの構築に向けて行ったハードウェアとソフトウェアの整備は、当初の目的を越えて充実したものとなった。これによって既存の文献資料、GIS によるマクロな地理情報、アクションカメラや GPS を用いたミクロな地理情報を関連させながら地域を包括的にとらえていくための準備が整いつつある。さらに本事業独自のホームページは、当初の目的であった和文ページ、英文ページの平成 27 年度内での公開を達成した。これによって、連携機関との本事業の内容や成果に関する相互理解が高まったことを実感している。今後は、本事業の研究成果や派遣報告書を和文および英文で順次掲載していくことで、よりいっそう充実したホームページとしていく予定である。

4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・著者名について、主著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付してください。 ・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付してください。 	
1	<u>梶 茂樹</u> (2015)「トーロ語における自他動詞の交替」, 『有対動詞の通言語的研究: 日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』(プラシヤント・パルデン、ハイコ・ナロック、桐生和幸編) 東京: くろしお出版, pp.337-350. (査読有)
2	<u>梶 茂樹</u> (2015)「アフリカの言語の世界」, 『星座』No.73, pp.14-15. (査読無)
3	<u>梶 茂樹</u> (2015)「アフリカ語①テンボ語」, 大気圏発ことば旅第74回, 『星座』No.74, pp.36-39. (査読無)
4	<u>梶 茂樹</u> (2015)「アフリカ語②レガボ語」, 大気圏発ことば旅第75回, 『星座』No.75, pp.36-39. (査読無)
5	<u>池野 旬</u> (2015)「タンザニアにおける土地政策の変遷—慣習的な土地権に着目して—」 武内進一(編)『アフリカ土地政策史』東京: アジア経済研究所 pp. 121-145. (査読有)
6	<u>池野 旬</u> (2016)「農村世帯の独立自営と強調行動—北部タンザニア都市近郊農村の水資源利用の軌跡から」 高橋基樹・大山修一(編)『開発と共生のはざま—国家と市場の変動を生きる』(アフリカ潜在カシリーズ 太田至 総編集 第3巻) 京都: 京都大学学術出版会 pp. 59-90. (査読無)
7	<u>池野 旬</u> (印刷中)「タンザニアの『村落土地法』(抄訳)—customay という単語をめぐる試訳—」 武内進一(編)『冷戦後アフリカの土地政策—中間成果報告—』 調査研究報告書 東京: アジア経済研究所 pp. 131-162. (査読無)
8	<u>木村 大治</u> (2016)「定住と遊動の文化」内堀基光(編)『人類文化の現在: 人類学研究』東京: 放送大学教育振興会(査読無)
9	<u>木村 大治</u> (2016)「文化の広がりへの極限」内堀基光(編)『人類文化の現在: 人類学研究』東京: 放送大学教育振興会(査読無)
10	<u>木村 大治</u> (2016)「ケアという文化の生成」内堀基光(編)『人類文化の現在: 人類学研究』東京: 放送大学教育振興会(査読無)
11	<u>木村 大治</u> (2016)「『濃淡の論理』と『線引きの論理』—コンゴ民主共和国ワンバ地域における森の所有をめぐる—」『紛争をおさめる文化—不完全性とブリコラージュの実践』(アフリカ潜在力1)京都: 京都大学学術出版会(査読無)
12	<u>木村 大治</u> (2016) (印刷中)「『道具性』と『手性』」『手の事典』東京: 朝倉書店(査読無)
13	<u>木村 大治</u> , 久保田翠, 石幡愛(2016)「志向を深める/想像を広げる 5」としまアートステーション(査読無)
○ 14	Hockings, KJ.*, Bryson-Morrison, N., Carvalho, S., Fujisawa, M., Humle, T., McGrew, WC., Nakamura, M., Ohashi, G., Yamanashi, Y., <u>Yamakoshi, G.</u> and Matsuzawa, T. (2015) Tools to tipple: Ethanol ingestion by wild chimpanzees using leaf-sponges. <i>Royal Society Open Science</i> 2: 150150. http://dx.doi.org/10.1098/rsos.150150 (査読有)

15	山越 言*, 目黒紀夫, 佐藤哲 編著 (2016) 『アフリカ潜在力 5 自然は誰のものか: 住民参加型保全の逆説を乗り越える』 京都: 京都大学学術出版会(査読無)
16	山越 言* (印刷中) 「神聖な森と動物の将来—在来知と科学知の対話に向けて」山越言, 目黒紀夫, 佐藤哲 編『アフリカ潜在力 5 自然は誰のものか: 住民参加型保全の逆説を乗り越える』 京都: 京都大学学術出版会(査読無)
17	山越 言*, 目黒紀夫, 佐藤哲 (印刷中) 「アフリカの自然は誰のものか—参加型自然保護活動の現状と将来像」山越言, 目黒紀夫, 佐藤哲 編『アフリカ潜在力 5 自然は誰のものか: 住民参加型保全の逆説を乗り越える』 京都: 京都大学学術出版会(査読無)
18	山越 言* (印刷中) 「野生動物との距離をめぐる人類史」河合香吏 編『他者—人類社会の進化』 京都: 京都大学学術出版会(査読無)
19	Takada, A. (in press) Education and learning during social situations among the Central Kalahari San. In B. Hewlett & H. Terashima (eds.), <i>Social learning and innovation in contemporary hunter-gatherers: Evolutionary and ethnographic perspectives</i> . Tokyo: Springer. (査読有)
20	Takada, A. (in press) Unfolding cultural meanings: Wayfinding practices among the San of the Central Kalahari. In W. Lovis & R. Whallon (eds.), <i>Marking the Land: Hunter-gatherer creation of meaning in their environment</i> . London: Routledge. (査読有)
21	Takada, A. (ed.) (2016) Special Issue: Natural history of communication among the Central Kalahari San. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> , 52 , 1-187. (査読有)
22	Takada, A. (ed.) (2016) Introduction to the supplementary issue “Natural history of communication among the Central Kalahari San”. Special Issue: Natural history of communication among the Central Kalahari San. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> , 52 , 5-25. (査読有)
23	Takada, A. (ed.) (2016) Employing ecological knowledge during foraging activity: Perception of the landform among the G ui and G ana. Special Issue: Natural history of communication among the Central Kalahari San. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> , 52 , 147-170. (査読有)
24	高田 明 (2015) ゴフマンのクラフトワーク: その言語人類学における遺産. 中河伸俊・渡辺克典(編), 触発するゴフマン: やりとりの秩序の社会学. 東京: 新曜社, pp.229-255. (査読無)
○ 25	Takada, A., Nyamongo, I. and Teshirogi, K. (eds.)(2014) Special Issue: Exploring African potentials: The dynamics of action, living strategy, and social order in Southern Africa. <i>MILA - A Journal of the Institute of Anthropology, Gender and African Studies</i> 12 : iii-iv,1-75. (査読有)
26	Ichino, S., Soma, T., Miyamoto, N., Chatani, K., Sato, H., Koyama, N. and Takahata, Y. (2015) Lifespan and reproductive senescence in a free-ranging ring-tailed lemur (<i>Lemur catta</i>) population at Berenty, Madagascar. <i>Folia Primatologica</i> . 86 (1-2): 134-139. (査読有)
27	Zi, Y. (2015) The Challenges for Chinese Merchants in Botswana: A Middleman Minority Perspective. <i>Journal of Chinese Overseas. Volume 11, Issue 1</i> , pp. 21-42. ISSN: 1793-0391. (査読有)
28	Zi, Y. (2015) The ‘Fong kong’ Phenomenon in Botswana: A Perspective on Globalisation from Below. Centre for Chinese Studies, Stellenbosch University. <i>African East-Asian Affairs, Issue 1</i> , pp.6-27. (査読有)
29	Zi, Y. (2015) The China Shop Phenomenon: The Case of Chinese Merchants in Gaborone, Botswana. PULA: <i>Botswana Journal of African Studies Vol. 29, No. 1</i> , pp.45-67. University of Botswana. (査読有)

②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <p>・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、主たる発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。</p> <p>・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。</p>	
1	池野 旬 (2016) 第 1 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー. 京都大学, 京都, 2016 年 3 月 4 日. (イントロダクション) (審査無) (口頭発表)
2	木村 大治 (2015) 「フィールドにおける調査と分析の『その場での』往還」フィールドサイエンス・コロキウム 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京, 2015 年 7 月 10 日. (審査有) (口頭発表)
3	Kimura.D. (2015) `Interpenetration of Self' Observed in Baka's Social Interaction 11th International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHaGS11) University of Vienna, Vienna, Austria, 8th September. (審査有) (口頭発表)
4	Kimura.D. (2015) "Bushmeat hunting, empty forest syndrome and livestock breeding: A case in DR-Congo" Ghana Grasscutter Project Seminar, University of Ghana, Accra, Ghana, 1st October. (審査有) (口頭発表)
5	Kimura.D. (2015) "AFlora: A Database of Plant Use in Africa", FOSAS international symposium, Mont Febe Hotel, Yaounde, Cameroon, 11-12 November. (審査有) (ポスター発表)
6	木村 大治 (2016) 「アフリカの声の世界とインターネット・コミュニケーション」連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」シリーズ 20「コミュニケーション」を考える (第 3 回), 京都大学東京オフィス(品川), 2016 年 1 月 27 日. (審査有) (口頭発表)
7	山越 言 (2016) 第 2 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー. 京都大学, 京都, 2016 年 3 月 11 日. (ディスカッサント) (審査無) (口頭発表)
8	山越 言*, 杉山幸丸, 松沢哲郎, 座馬耕一郎(2015)「ギニア, ボツワナの野生チンパンジー群における耳部損傷頻度の定量化: センサーカメラを用いた個体識別と生息密度推定への応用に向けて」第 25 回日本熱帯生態学会年次大会, 京都大学, 京都. 2015 年 6 月 20-21 日 (審査有) (ポスター発表)
9	Yamakoshi, G. (2015) "Ethologie et ethnohistoire des chimpanzés" Séminaire: « Anthropologie évolutionnaire » Animalités croisées, animalités partagées. Centre de la Vieille Charité, Marseille, 8-9 June (審査無) (口頭発表)
10	山越 言 (2015) 「西アフリカの精霊の森のチンパンジー探検記: わたしたちの祖先と暮らす人々」平成 27 年度第 5 回「信州サイエンステクノロジーコンテスト」～「科学の甲子園」長野県予選～サイエンス講演会, 2015 年 11 月 14. (審査無) (口頭発表)
11	高田 明 (2016) 第 3 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー. 京都大学, 京都, 2016 年 3 月 18 日. (イントロダクション) (審査無) (口頭発表)
12	高田 明 (2016) 第 2 回アフリカ地域研究パラダイム再編セミナー. 京都大学, 京都, 2016 年 3 月 11 日. (イントロダクション) (審査無) (口頭発表)
13	Takada, A. (2015) Action anticipation in singing and dancing activities among toddlers of the !Xun of north-central Namibia. Paper presented at Loch Lomond Symposium on Action Anticipation, Ross Priory, Loch Lomond, 2-4 September (3rd September) Abstracts, p.13. (招待講演) (口頭発表)
14	Takada, A. (2015) Socialization of toddlers through participating in singing and dancing activity of multi-aged child group of the !Xun of north-central Namibia. Paper presented at Revisiting Participation. Language and Bodies in Interaction, University of Basel, Switzerland, 24-27 June (26th June). (審査有) (口頭発表)

15	<u>Takada, A.</u> (2015) Unfolding cultural meanings: Wayfinding practices among the G ui/G ana of the Central Kalahari. Paper presented at the Satterthwaite Colloquium on African Ritual and Religion, Grasmere, U.K., 25-28 May (28th May) Abstracts, p.9. (審査有) (口頭発表)
16	<u>Takada, A.</u> (2015) What kinds of child and family studies can an anthropologist conduct? A case study of the !Xun of north-central Namibia. Paper presented at the NIAS workshop "Children seen and heard across the globe: A multidisciplinary cross-cultural approach to video data of family life and child development", NIAS, Wassenaar, the Netherlands, 29 April - 1 May (29th April). (審査有) (口頭発表)
17	高田 明 (2015) 社会的状況における教育と学習：セントラル・カラハリ・サンの事例から。ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究 第10回研究大会。高知会館。2015年3月7-8日。赤澤 威(編), ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究 第10回研究大会プロシーディング, p.72. (審査有) (ポスター発表)
18	<u>Takada, A.</u> (2015) Panel discussant of Plenary III: CHAGS11: What have we learnt. The 11th Conference on Hunting and Gathering Societies, University of Vienna, Vienna, 7-11 September (11th September). CHAGS XI Complete Printed Program, p.25. (審査有) (口頭発表)
19	<u>Takada, A.</u> (2015) Kinship and naming practices among the !Xun of north-central Namibia. Paper presented at the 11th Conference on Hunting and Gathering Societies, University of Vienna, Vienna, 7-11 September (8th September). CHAGS XI Complete Printed Program, p.39. (審査有) (口頭発表)
20	<u>Takada, A.</u> (2014) Communicative musicality and socialization among the !Xun of north-central Namibia. Paper presented at Series of guest lectures in psychology, Center for Developmental & Applied Psychological Science, Aalborg University, Denmark, 27th November. (招待講演) (口頭発表)
21	<u>Takada, A.</u> (2014) Spatial perception among the San of the central Kalahari: Frames of reference in wayfinding practices. Paper presented at the panel "'Indigenous" space and local politics" for the ASA(Association of Social Anthropologists of the UK and Commonwealth)14 Decennial conference: Anthropology and Enlightenment, Edinburgh, 19-22 June (21st June). Abstracts, p.86. (審査有) (口頭発表)
22	<u>Ichino, S.*</u> , Soma, T., Miyamoto, N., Chatani, K., Sato, H., Koyama, N. and Takahata Y. (2015) A 26-year study of ring-tailed lemurs (<i>Lemur catta</i>) at Berenty Reserve, Madagascar. The 4th International Seminar on Biodiversity and Evolution: Molecular Studies for Wildlife Science, Kyoto University North Campus Science Seminar House, Kyoto. 9th June. (審査有) (ポスター発表)
23	市野進一郎*, 相馬貴代, 宮本直美, 小山直樹 (2015) 「マダガスカル南部の川辺林におけるタマリンドの枯死」日本アフリカ学会第52回学術大会, 愛知県犬山市. 2015年5月24日. (審査有) (口頭発表)
24	市野進一郎*, 相馬貴代, 宮本直美, 小山直樹 (2015) 「マダガスカル南部川辺林におけるタマリンド大径木の枯死」第25回日本熱帯生態学会年次大会, 京都. 2015年6月20日. (審査有) (口頭発表)
25	市野進一郎*, 相馬貴代, 宮本直美, 小山直樹, 高畑由起夫 (2015) 「ワオキツネザルのオスの分散様式」第31回日本霊長類学会大会, 京都. 2015年7月19日. (審査有) (口頭発表)
26	<u>Zi, Y.</u> (2015) Decoding Labour Issues between Chinese Employers and Botswana Employees: The Case of a China Shop in Gaborone. Conference 'Southern Africa beyond the West' held by Southern African Institute for Policy and Research (SAIPAR) and Journal of Southern African Studies (JSAS), at the Protea Hotel, Livingstone, Zambia, 7-11 August. (審査有) (口頭発表)

5. 若手研究者の派遣実績（計画）

【海外派遣実績（計画）】

年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	合計
派遣人数	2 人	5 人 (2 人)	4 人 (4 人)	5 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の海外派遣実績】

派遣者①の氏名・職名：市野進一郎・ポスドク

（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

市野進一郎博士は、アフリカ地域における新たな研究課題である「アフリカ生物保全学」を推進するため、メガ多様性国であるマダガスカルで先進的な研究を進めているドイツ霊長類センターとその連携機関であるアンタナナリヴ大学、日本側の担当研究者である山越准教授らと協力して共同研究を推進する。

（具体的な成果）

平成 27 年度はまずアンタナナリヴ大学に市野進一郎博士を派遣し、アフリカセンターの研究グループが 1989 年からマダガスカル南部で続けてきた長期継続調査の基礎データに基づいて、今後の研究協力および地域密着型の保全活動を進めていくための議論を行った。続けて、市野博士はドイツ霊長類センターを訪問し、ドイツ、マダガスカル、日本を中心にマダガスカルの長期研究サイトネットワークを形成し、保護区管理に関する国際共同研究を推進していくための折衝・調整を行った。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
マダガスカル, アンタナナリヴ大学, 理学部動物学科, Hajanirina Fanomezantsoa Rakotomanana 教授	40 日	90 日	50 日	180 日
ドイツ, ドイツ霊長類センター, 行動生態学・社会生物学部門, Peter Kappeler 教授	13 日	107 日	60 日	180 日

派遣者②の氏名・職名：髻彦闇・ポスドク

（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

髻彦闇博士は、平成 27-28 年度にかけて南アフリカのケープタウン大学とドイツのケルン大学に客員研究員として滞在し、アフリカにおけるグローバル化に関する共同研究の一環として、南部アフリカにおけるアジア人コミュニティの形成に関する共時的・通時的な分析を行う。当初の研究目的の 1 つとして設定されていたアフリカ地域における多文化共生に関する研究を推進するため、欧州での派遣先はアフリカにおけるアジア人コミュニティについての研究が盛んなドイツのケルン大学とする。また平成 28 年度にはカナダのブリティッシュ・コロンビア大学で開催される ISSCO 学会およびケニアのアガ・カーン大学で開催される Chinese in Africa/African in China Conferense 学会、ドイツのゲーテ大学で開催される African-Asian Encounters 学会に参加する予定である。

（具体的な成果）

平成 27 年度はまず本事業で日本に招へいしたケープタウン大学の主要連携研究者、およびケルン大学の連携研究者とこれから両大学に滞在して共同研究を行っていくための折衝・調整を行った。3 月末からは南アフリカのケープタウン大学を訪問して、訾彦岡博士が進めてきた南部アフリカにおけるアジア人コミュニティの形成に関する共同研究を開始する予定である。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
南アフリカ, ケープタウン大学, アフリカ言語多様性研究センター, Matthias Brenzinger 所長	4 日	137 日	0 日	141 日
カナダ, ブリティッシュ・コロンビア大学	0 日	10 日	0 日	10 日
ケニア, アガ・カーン大学	0 日	7 日	0 日	7 日
ドイツ, ケルン大学, ケルン・グローバルサウス研究センター, Thomas Widlok 教授	0 日	168 日	0 日	168 日
ドイツ, ゲーテ大学	0 日	3 日	0 日	3 日

※本年度の派遣者毎に作成すること。

6. 研究者の招へい実績 (計画)

【招へい実績 (計画)】

年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	合計
招へい人数	6 人	2 人 (0 人)	2 人 (0 人)	10 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の招へい実績】

招へい者①の氏名・職名：**Clemens Greiner**・上級講師

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

本プロジェクトにおいて Greiner 上級講師は、アフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究を推進する役割を担う。とくに、ドイツにおけるアフリカ諸地域を対象とした景観研究と民族学研究の関係に着目し、上記の課題についての議論を行う。

(具体的な成果)

平成 27 年度は、Greiner 上級講師を日本に招へいし、2014 年に新設されたケルン大学ケルン・グローバルサウス研究センター設立の主旨とこれまでの活動成果、および Greiner 上級講師自身が進めてきたケニア、ナミビアにおける環境利用および社会経済的な人の移動と階層化に関して、日本側の受入研究者らと議論を行った。また、平成 28 年度から京都大学の若手研究者をケルン大学に受け入れてもらうための体制の整備に関わる折衝・調整を行った。

招へい元 (機関名、部局名、国名) 及び	招へい期間

日本側受入研究者（機関名）	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	合計
ケルン大学・ケルン・グローバルサウス研究センター，ドイツ；日本側受入研究者：高田明（京都大学）	12 日	0 日	0 日	12 日

招へい者③の氏名・職名：Matthias Brenzinger・所長

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>本プロジェクトにおいて Brenzinger 所長は，アフリカにおけるローカルな知の活用に関する国際共同研究の中心的な役割を担う．とくに，ケープタウン大学・アフリカ言語多様性研究センターが所蔵している豊富な資料を活用して南部アフリカのサンの身体的・言語的コミュニケーションについてのコーパスを構築し，それを体系的に整理・解析・利用していくことを目指す．</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>平成 27 年度は，Brenzinger 所長を日本に招へいし，同氏が所長を務めるケープタウン大学・アフリカ言語多様性研究センターの活動成果，および Brenzinger 所長が Shah 研究者らと推進しているレソトやナミビアでの調査に基づいてアフリカにおける言語的多様性とアイデンティティの関係について日本側の受け入れ研究者らと議論を行った．また，日本の沖縄でやはり言語的多様性とアイデンティティの関係について共同研究を進めていくための調整を行った．またケープタウン大学での若手研究者の受入体制に関わる折衝・調整を行った．</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ケープタウン大学・アフリカ言語多様性研究センター，南アフリカ；日本側受入研究者：高田明（京都大学）	16 日	0 日	0 日	16 日

招へい者⑨の氏名・職名：Sheena Shah・研究員

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>本プロジェクトにおいて Shah 研究員は，アフリカにおけるローカルな知の活用に関する国際共同研究を推進する役割を担う．とくにケープタウン大学・アフリカ言語多様性研究センターが所蔵している豊富な資料を活用して南部アフリカのサンの身体的・言語的コミュニケーションについてのコーパスを構築し，それを体系的に整理・解析・利用していく国際共同研究の実務を担う．</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>平成 27 年度は，Shah 研究員を Brenzinger 所長とあわせて日本に招へいし，ケープタウン大学・アフリカ言語多様性研究センターの活動成果，および Shah 研究員らが Brenzinger 所長の監督のもとに推進しているレソトやナミビアでの調査に基づいてアフリカにおける言語的多様性とアイデンティティの関係について日本側の受け入れ研究者らと議論を行った．また，日本の沖縄でやはり言語的多様性とアイデンティティの関係について共同研究を進めていくための調整を行った．また Shah 研究員は，ケープタウン大学での若手研究者の受入体制に関わる折衝・調整にも参加した．</p>				
--	--	--	--	--

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ケープタウン大学・アフリカ言語多 様性研究センター，南アフリカ；日 本側受入研究者：高田明（京都大学）	16 日	0 日	0 日	16 日

招へい者⑩の氏名・職名：Francis B. Nyamnjoh・教授

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>本プロジェクトにおいて Nyamnjoh 教授は，アフリカ地域の空間的・時間的な組織化に関する国際共同研究を推進する役割を担う．とくに，Nyamnjoh 教授自身が進めてきたカメルーンおよびボツワナにおけるエスニシティの形成，維持，変容に関わるコミュニケーションについての研究に立脚し，やはり同地でこれに関連する研究を進めてきた日本側の担当研究者（木村，高田）と教育研究の協力体制を確立する．</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>平成 27 年度は，Nyamnjoh 教授を国際シンポジウム “African Potentials 2016: International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence” の開催に合わせて日本に招へいし，“Incompleteness and Conviviality: A Reflection on International Research Collaboration from an African Perspective” というタイトルで国際共同研究を進めていく面白さや困難についての議論を行った．またケープタウン大学での若手研究者の受入体制に関わる折衝・調整を行った．</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
ケープタウン大学・社会人類学部， 南アフリカ；日本側受入研究者：高 田明（京都大学）	9 日	0 日	0 日	9 日

招へい者⑪の氏名・職名：Gebre Yntiso Deko・学部長

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>本プロジェクトにおいて Gebre Yntiso Deko 学部長は，アフリカにおけるローカルな知の活用と地域のデザインに関する国際共同研究の中心的な役割を担う．とくに，Gebre Yntiso Deko 学部長自身が，米国流の文化人類学と ASAFAS の地域研究を融合させ，アジス・アベバ大学で推進しつつあるフィールドワークの手法を活用し，アジス・アベバ大学とアフリカセンターや ASAFAS アフリカ専攻との間で推進してきた長期的な教育研究協力体制をさらに発展させることを目指す．</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>平成 27 年度は，Gebre Yntiso Deko 学部長を国際シンポジウム “African Potentials 2016: International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence” の開催に合わせて日本に招へいし，“Systematizing Knowledge about Customary Laws in Africa: The Case of Ethiopia” というタイトルで，同氏が調査を進めてきたエチオピアの事例に基づいて，アフリカにおける慣習的な法実践の特徴とその現代的意義に関する議論を行った．またアジス・アベバ大学での若手研究者の受入体制，および京都大学での招へい研究者の受入体制に</p>				
--	--	--	--	--

関わる折衝・調整を行った。				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
アジス・アベバ大学・社会科学学校， エチオピア；日本側受入研究者：池 野旬（京都大学）	9 日	0 日	0 日	9 日

招へい者④の氏名・職名：Hajanirina Fanomezantsoa Rakotomanana・教授

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>Rakotomanana 教授は、地域のデザインに関する国際共同研究にマダガスカル代表者として参加する。具体的には、同教授が主に研究活動を行っているマダガスカル北西部アンカラファンチカ国立公園の事例を中心に、マダガスカルで生物多様性保全の研究が行われている研究サイトの状況について情報収集を行ってもらおうと同時に、マダガスカル長期研究ネットワークの中心メンバーとして活動していただく。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>平成 27 年度は、Rakotomanana 教授を約 2 ヶ月間日本に招へいし、同教授が長年推進してきたマダガスカルにおける鳥類の保全と地域住民の生活の関係に関する研究について報告していただき、やはり野生動物の保全と地域住民の生活の関係に関する研究を行ってきた日本側の受け入れ研究者らと議論を行った。また、マダガスカル、日本、ドイツの研究者が協力してマダガスカルにおける生物多様性の保全と管理を進めていくための具体的な方策、および若手研究者をマダガスカルに派遣する際に円滑にフィールド調査を行うための受入体制の整備について折衝・調整を行った。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	
アンタナナリヴ大学・理学部動物学科， マダガスカル；日本側受入研究者：山越言（京都大学）	63 日	0 日	0 日	63 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

該当なし

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。